病態解析検査学特論Ⅰ（Advance of Pathophysiological Analysis Ⅰ）

担 当 教 員	開講年次	選択必修	単位数	時間数	授業形態	実務経験	オフィスアワー	教職員への授業公開
森 啓至、小菅 優子	１年次 前 期	選択	2	30	講義	あり	巻末掲載	可

授業概要 （内容と進め方） 及び 課題に対する ﾌｨｰﾄﾞﾊﾞｯｸ方法	病態解析検査学特論Ⅰでは、神経変性疾患のうちのアルツハイマー型認知症について、その概要から基礎病態について解説し、これら疾患に対して現在我が国が抱える現状について考える。同時に中枢神経系の末梢器官とりわけ消化管に及ぼす障害について、脳腸軸の標的である腸を中心に問題点を学修する。 課題に対するフィードバック方法／レポートに対して討論するほかコメントをつけて返却する。 実務家教員（森、小菅）が講義を進める。
授業の位置づけ	本学のディプロマ・ポリシー②「専門職業人として医療に対する幅広い知識と技能を駆使し、高度な臨床検査を実施できる」および③「健康に対する社会的ニーズを認識するとともに、グローバルな視野を持ち、科学的根拠に基づき、自ら考え、判断し、課題解決に向けて対応することができる。」の達成に寄与している。
到達目標 （履修者が到達すべき目標）	1. 健常人の高次脳機能について説明できる。 2. 認知症の種類とそれぞれの基礎病態について説明できる。 3. 高次脳機能障害が消化管に及ぼす影響を説明できる。 4. 在宅医療での臨床検査技師の役割を認知症患者について考え説明することができる。
時間外学習に必要な学修内容および学習上の助言	第1回～第15回事前学習：事前に計画されている単元について予習を行っておく／分からない用語については調べておく（各30分） 第1回～第15回事後学習：講義内容で不明な点は、講義終了直後もしくはオフィスアワーを利用して質問するなどして明確にするよう努める／毎回の講義の復習を十分行うこと。英語論文を多く読み、読解力をつけること。（各30分） ※上記時間については、指定された学習課題に要する標準的な時間を記載してあります。日々の自学自習全体としては、各授業に応じた時間（２単位15回科目の場合：予習+復習４時間／1回）（１単位15回科目の場合：予習+復習1時間／１回）（１単位８回科目の場合：予習+復習４時間／１回）を取るよう努めてください。詳しくは教員の指導に従ってください。

授業計画			
	第 1 回	中枢神経系の解剖と機能調節	森 啓至
	第 2 回	高次脳機能について	森 啓至
	第 3 回	神経変性疾患の種類と病態	森 啓至
	第 4 回	認知症の基礎	森 啓至
	第 5 回	アルツハイマー型認知症の基礎と病態	森 啓至
	第 6 回	アルツハイマー型認知症に対する検査と治療	森 啓至
	第 7 回	国内におけるアルツハイマー型認知症の現状と対策	森 啓至
	第 8 回	アルツハイマー型認知症の早期発見と臨床検査	森 啓至
	第 9 回	機能性消化管障害の病態解析１（講義）	小菅優子
	第 10 回	機能性消化管障害の病態解析２（ゼミ）	小菅優子
	第 11 回	健康食品管理における臨床検査技師の役割１（講義）	小菅優子
	第 12 回	健康食品管理における臨床検査技師の役割２（ゼミ）	小菅優子
	第 13 回	在宅医療における健康食品摂取と薬剤の相互作用について１（講義）	小菅優子
	第 14 回	在宅医療における健康食品摂取と薬剤の相互作用について２（講義）	小菅優子
	第 15 回	在宅医療における健康食品摂取と薬剤の相互作用について３（ゼミ）	小菅優子

評価方法 評価基準	レポートで評価する（100%）		
教科書	特に定めない	参考書等	担当教員が資料を配布する。
学生への メッセージ	認知症はこれからの社会において避けては通れません。認知症は神経変性疾患が主な要因と考えられます。中枢神経系の生理学をよく学習し、脳と全身とりわけ消化管との関りについて理解してください。		